

研究部の満屋裕明教授を招き、「HIV 感染症とエイズの治療薬の開発〜有機化学・薬理学・ウイルス学・結晶解析学・臨床科学を糾合させて〜」という演題で講演いただき、聴衆に深い感銘を与えました。

また、一般講演には口頭発表とポスター発表のいずれにも西南部会としては初めてとなる優秀発表賞を設け、いずれも大変好評でありました。

昼食時間帯には学術評議員会も開催され、すべての演題終了後、ニュースカイホテルで懇親会が開催されました。懇親会にも、日本薬理学会理事長や名誉会員の先生方などの招待者を含めて部会としては異例の百数十名の参加者があり、山鹿灯籠踊りや熊菓アンサンブルの演奏などもあつて、大変盛会で好評でありました。

本稿を閉じるにあたり、資金援助をいただいた肥後医育振興会に心より感謝とお礼を申し上げます。併せて、ご協賛いただいた企業・各種団体、広告を掲載いただいた企業および各種団体にもこの場を借りて御礼申し上げます。

第五十七回日本未熟児新生児学会学術集会報告

学術集會会長 (熊本市民病院総合周産期
母子医療センター新生児内科部長)

近藤 裕一

日本未熟児新生児学会は、日本小児科学会の分科会としては最も古く、かつ会

員数が三二〇〇余名を擁する若手主体の活気あふれる学会です。

その第五十七回学術集会を、平成二十四年十一月二十五日(日)〜二十七日(火)の三日間、熊本市(ホテル日航熊本、県民交流館パレア、鶴屋ホール)において開催いたしました。

テーマに「和で育む新生児とその医療」を掲げました。新しい命の誕生に関わる新生児医療では、家族を中心に多くの職種のとが求められます。学術集会は、新しい知見を発表し議論を戦わせると同時に新生児のために尽くす専門職同士の和を築く機会でもあるとの考えからです。

おかげで、本学術集会には約一一〇〇名の参加をいただきました。これは東京・大阪以外では過去最高で、一般演題が五〇〇題を超えるという本学会の新記録を達成しました。

特別講演は、日本先天代謝異常学会理事長でもあります熊本大学小児科遠藤文夫教授に、「先天代謝異常の先端研究と新生児医療を結ぶ」と題して難解になりがちな代謝を熊本での臨床経験を中心にわかりやすくお話しいただき、こんな講演は初めて聴いた、分かりやすかったとの言葉をいただきました。

韓国の朴相奇教授の招待講演は、FGR児の発達、発育という時宜を得たテーマで、基礎研究と臨床を両立されている姿に触れ、驚きました。

教育講演では、熊本大学薬学部、当院病院薬剤師との連携、熊本大学小児科における新生児脳障害の基礎および臨床研究、再春荘病院を中心の小児在宅医療などを披露していただき全国に熊本のパワーを発信しました。

シンポジウムは、産科にいる新生児、そして退院して間もない新生児と親のために何をなすべきか、大病院・一般病院・開業医そして行政の連携も話題としました。さらに早産児の黄疸、ワクチンによるNICU感染予防、サーファクタント投与方法、双胎間輸血症候群を取り上げました。

同時に当院看護副部長が会長を務めた第二十二回日本新生児看護学会学術集会が市民会館崇城大学ホール等で開催されたのですが、それとの合同シンポジウムでも医療者間そして家族との和をテーマに話し合いました。

若手が主役の企画として、学会賞受賞記念講演、英国留学体験記、教育セミナー優秀演題発表、ミニシンポジウム(診断のピットフォール)や若手教育セミナーを開催しました。朝、夕のサテライトセミナーや関連集会と盛りだくさんのプログラムでしたが、どこも盛況で好評でした。

会員懇親会には、村田副知事、幸山市長、福田県医師会長にも参加いただき、有料参加者も過去最高で、お開きまで退席する方もなく大変盛り上がりました。熊本の海の幸、山の幸そしてビール、ワイン、酒、焼酎にこだわったもてなしの力と確信しております。

この学術集会が、熊本の新生児医療・医学のさらなる飛躍のきっかけになったと信じております。

最後になりましたが、本学術集会の開催に向けて多大なお力添えいただきました肥後医育会をはじめとする多くの方々のお力添えに感謝申し上げます。



▶肥後医育記念館 (昭和51年9月開設)